

第43回 憲法を考える映画の会

グアテマラの市民は、国家元首を追い詰め、裁いた。では、私たちは…

500年—権力者を 裁くのは誰か？



歴史的な裁判シーンが、この映画の前半のハイライトとなる。1980年代、中米の小さな国グアテマラで、軍が20万人以上のマヤ先住民を虐殺し、100万人の難民を生んだ。それから30年以上の時を経て、このおぞましい事件の責任を問うために、元国家指導者が大量虐殺の罪で訴追される。

写真: Daniel Hernández-Salazar

2018年6月3日 (日)

- 13時半～16時半
「500年—権力者を裁くのは誰か？」

6月30日 (土)

- 13時半～15時半
「グラニート—独裁者を追い詰める！」
- 15時半～16時半 トークシェア
- 17時～19時
「500年—権力者を裁くのは誰か？」

参加費：一般1000円 学生500円

文京区民センター

3A会議室 (地下鉄・春日駅/後樂園駅)

グラニート—独裁者を 追い詰める! (6月30日のみ)



第43回 憲法を考える映画の会

6月3日(日)・30日(土)

■ 文京区民センター3A会議室

(地下鉄春日駅・後楽園駅)

■ 参加費:一般1000円 学生500円

世界の各国で、抑圧から自由と民主主義を求めた市民が立ち上がって、独裁者を倒し、軍事政権を覆しています。中東グアテマラで続けられてきた市民の運動を描いた二つのドキュメンタリー。新作「500年」は、6月3日、30日両日、30日には前作「グラニート」と連続上映、市民運動と私たちのこれからを考えます。

グラニート — 独裁者を追い詰める!

6月30日(土) 13時30分~15時30分 (2010年制作/105分/パメラ・ウェイツ監督)



中央アメリカの国グアテマラは、1950年代前半の民主化が米国の干渉で阻止された。それ以来、軍の親米派と反米派や左派の対立が続き、1980年に始まった内戦が1996年の和平合意まで36年間も続いた。

親米軍事政権は反体制派のゲリラ戦に対抗するため、ゲリラや左派が潜入していると見られるマヤ系先住民の村を襲撃して焼き払い、住民を大量虐殺した。

この内戦で推定20万人が殺害、行方不明になった。

その多くは1982年に権力を掌握した元将軍エフライン・リオス・モントの1年半の統治下に集中している。この時期のすさまじい弾圧と虐殺については、内戦終結後も誰も責任を問われることなく政府は事実を否定しつづけていた。

ところが、そんなグアテマラで、2013年5月に驚くべき事件が起こった。

グアテマラの裁判所がリオス・モント元将軍に対し、ジェノサイドと人道に対する罪で、80年の刑を宣告したのだ。

中南米はもちろん、世界中を見渡しても元国家元首が自国の司法制度の中でジェノサイドの罪で裁かれるなんて初めてのことだ。しかも有罪判決が出た。

この国では、軍や特権的財閥に立つ者はたちまち惨殺されてきたことを考えると、このような社会の変化が起きたことはすごいことである。

そうした変化をもたらしたものは何か、考えさせるのが映画「グラニート」である。

(2010年制作/アメリカ・グアテマラ合作/105分/Pamela Yates監督)

500年 — 権力者を裁くのは誰か?

6月03日(日) 13時30分~16時30分

6月30日(土) 17時00分~19時00分

元国家元首が、自らの国で、虐殺の罪で裁かれるという前代未聞の裁判。

この裁判で、イニシアチブを取ったのは、女性たちだった。

民族衣装をまとった姿で、家族を虐殺され、自らもレイプ被害に遭った先住民の女性たちが命を賭けて証言するその法廷。

その「人道に反する罪」の首謀者としてリオス・モント元大統領を裁く裁判長も女性。一方で、その元大統領を「良き父であり、虐殺はでっち上げ」と主張する美しく着飾った白人女性スリ・リオス。

「500年」という作品タイトルは、コロンブスのアメリカ大陸到達から500年、そこにもともと住んでいた先住民が、どのような状況にあるのかを問いかけるもの。

前作「グラニート—独裁者を追いつめる!」では1980年代のグアテマラでの虐殺事件の責任を問うためにスペインでの審判を求める運動をカメラが追った。

しかし、その裁判で「リオス=モント元大統領の有罪」を宣告されたにもかかわらず、グアテマラ当局は、引き渡しを拒絶。

「ならば、この犯罪はグアテマラ人が自らの手で裁かなくてはならない」

人権運動家らの動きで、ついにはじまったグアテマラでの歴史的裁判が、この映画の前半の見どころとなる。

そして、息詰まる法廷闘争の末、裁判長は、虐殺の存在と大統領の関与を認定し、禁固50年の刑を宣告する。

国家元首が自国の司法制度で、「人道に反する」罪で裁かれたのは、ラテンアメリカのみならず、世界で初めてのことであった。それは、先住民の人々にとっては感動の一瞬だった。

しかし、リオス・モントの後継者のオットー・ペレス=モリーナ大統領は、この裁判の結果に激しい異議を唱え、この歴史的判決は憲法裁判所で無効とされてしまう。

しかし、明らかになった大統領の汚職問題は、ペレス=モリーナ自身も虐殺に関わっていた疑惑もからみ、先住民だけでなく、都市の住民、世代を超えた人々を巻き込んで、大統領辞任を求める国民的な運動へと広がっていく。

(2017年制作/アメリカ・グアテマラ合作/108分/Pamela Yates監督)



憲法を考える映画の会

TEL: 042-406-0502 E-mail: hanasaki33@me.com
http://kenpou-elga.com